

令和2年度 世界へのトビラ事業 講師研修会 開催報告

1. 日時 令和3年3月19日（金）13:30～15:30

2. 会場 オンライン各所（ZOOM使用）

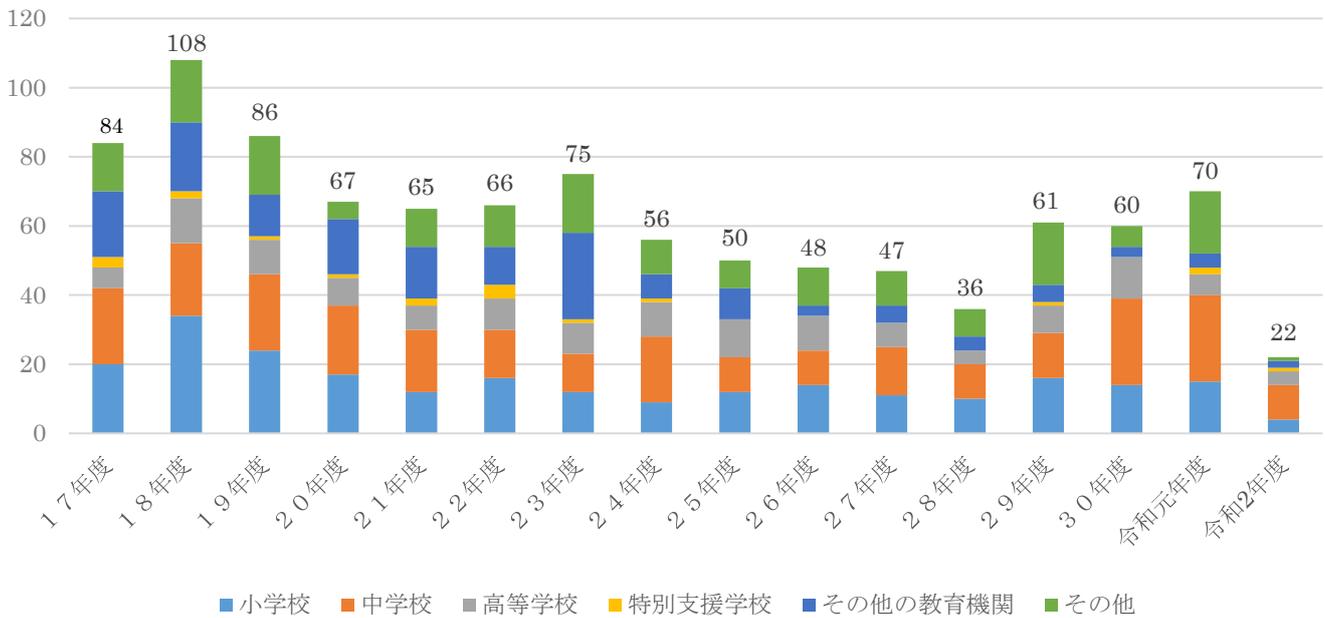
3. 参加者 21名

外国人講師 12名 日本人講師・アドバイザー 9名

4. 開催内容

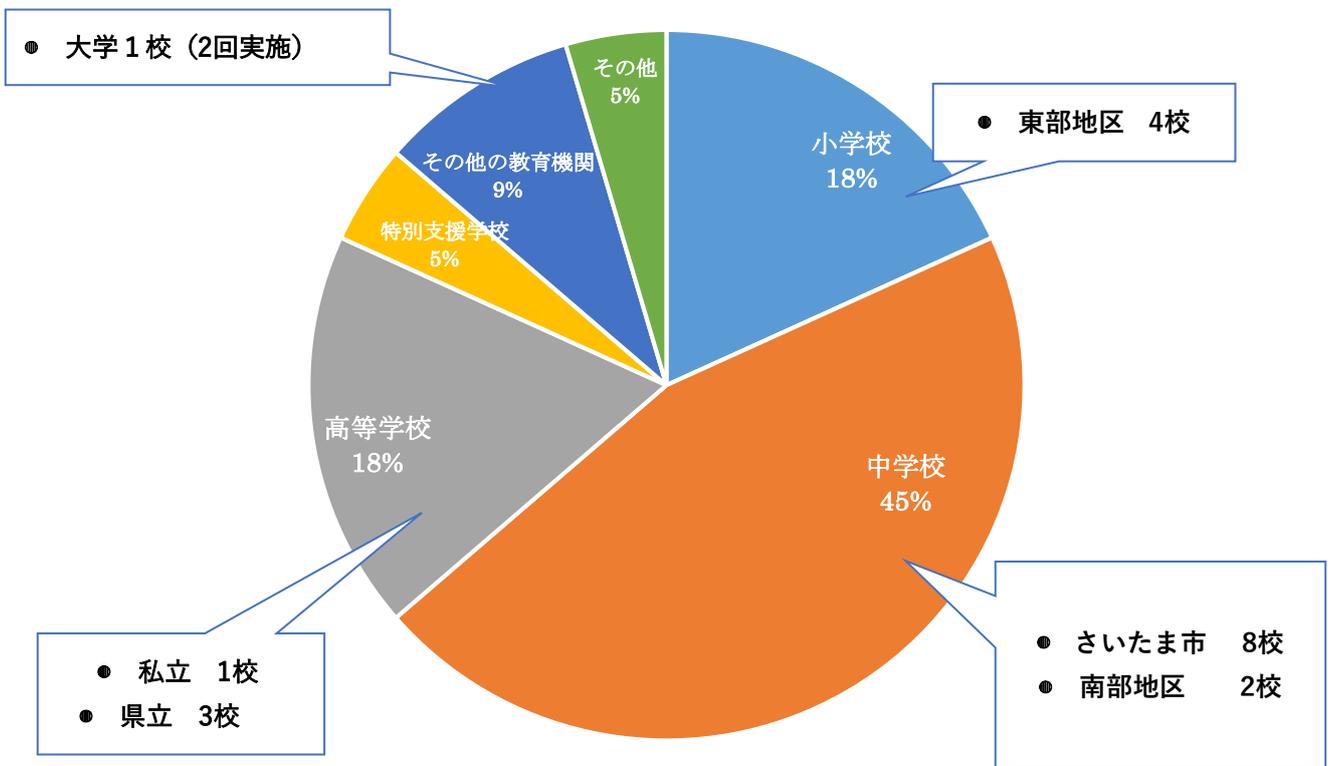
時間	内容
13:30～13:40	本日のスケジュール確認 事業実施結果報告
13:40～14:10	コロナ禍での実施についての情報共有 ・外国人講師より今年注意したこと、工夫したことの共有 ・アドバイザーより打合せで気を付けた点などの共有 ・より良い授業の為に改善案の意見交換
14:10～14:30	SDGsとは ・概要説明 ・外国人講師による国紹介RP（ロールプレイ） ・17の目標とのリンク付け
14:30～14:40	休憩
14:40～15:10	グループワーク 4つのグループに分かれて意見交換。 母国や活動国とSDGsの関わりについて、今後どのように取り入れていったらいいかを考える。
15:10～15:20	発表 各グループの意見交換の内容を代表者に発表してもらい共有
15:20～15:30	まとめ

年度別派遣実績 (平成17年度～令和2年度)



今年度の実績は 22 件。

派遣実績 (令和2年度 22件の内訳)



22 件のうち初めての依頼は 4 件。それ以外はすべてリピーターの学校等からの依頼が占めた。県内のエリアで見ると上尾、川口、加須などさいたま市に比較的近い場所での実施となった。

担当講師やアドバイザーを選ぶ際は、依頼内容に合わせるだけでなく自宅から実施場所までの移動距離に配慮して担当の声掛けを行った。昨年はオリンピックパラリンピックの影響で、70 件の内 25% ほど公民館で実施があったが今年は 5% で 1 件だけだったことも昨年との大きな違いであった。

授業の様子



マスクだけでなくフェイスシールドも併せて着用するように依頼のあった学校もあれば、講師の口の動きなども確認できるようにマウスシールドのみで授業ができる学校もあり、訪問する学校によって感染防止の為に制限は様々だった。



全体会や各授業はソーシャルディスタンスを意識して、密にならないことが求められた。



大声を出せない、物を共有することができない等の制限がある中でも、プロジェクターを上手に活用したり、体を動かす場合は換気を徹底したりしながら、訪問する講師も受け入れる学校も様々な創意工夫をしながら授業を行った。

学校と協会では下記の「感染防止対策シート」を必ず共有して安全で安心な実施ができるように対応。

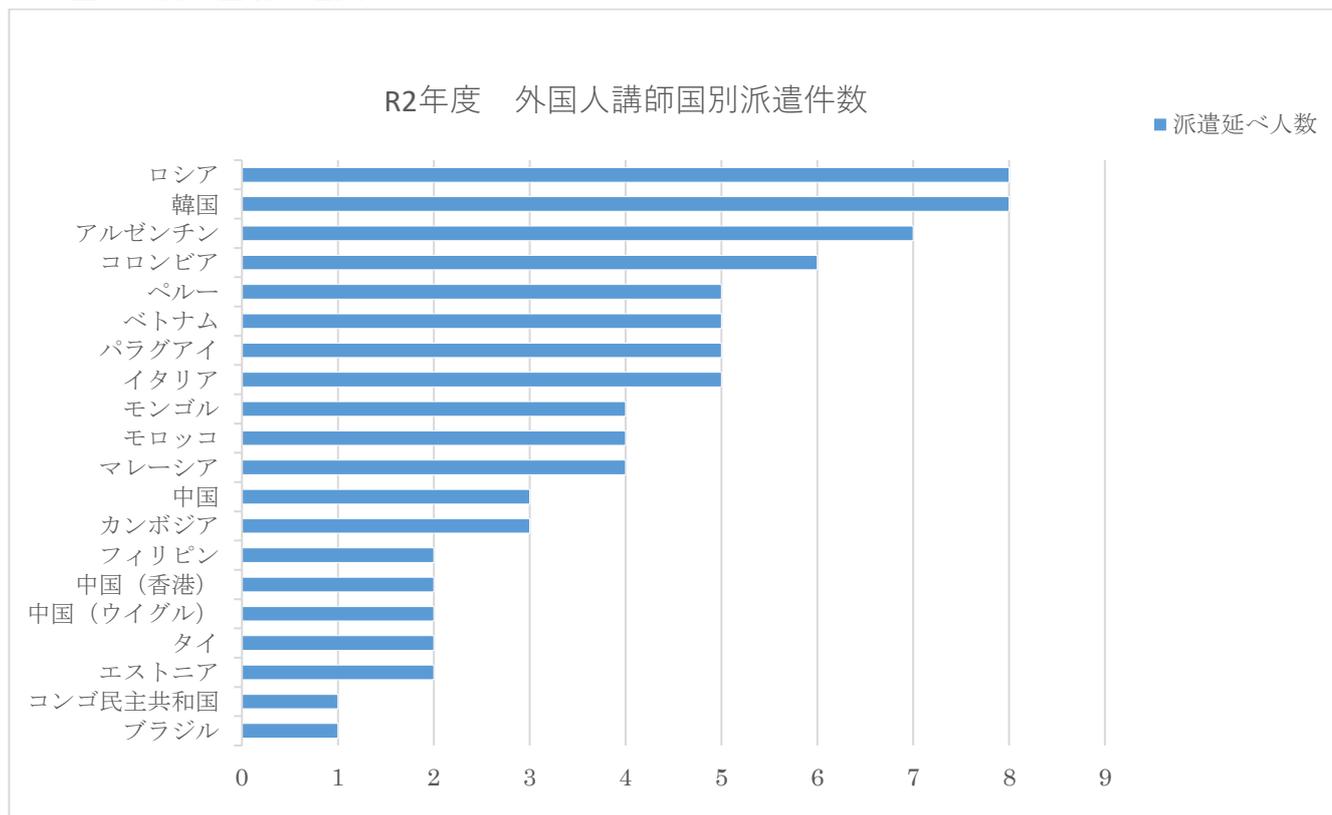
コロナウィルス感染防止対策確認シート			Check ✓
参加者と講師の安全・安心のために行っていたこと	事前準備等	講師派遣決定後においても、場合により講師の変更や派遣人数の変更が発生することを踏まえて事業を計画します。	
		利用施設の定員（通常定員の半分）を厳守します。ただし、学校の場合はその学校の状況を考慮し、利用場所を提供します。	
		会場（学校等）において手指消毒を実施します。 （アルコールスプレー等をご用意ください）	
	飛沫感染リスクへの対応	参加者全員のマスク着用を徹底します。	
	密集・密接を避けるための対応	参加者及び講師が待機する際は、ソーシャルディスタンスを確保できる場所をご案内します。	
		休憩中も参加者及び講師がソーシャルディスタンスを確保できるように配慮します。	
	参加者への対応	参加者の体温を測定して 37.5 度以上の方の参加を防止します。 （可能であれば、非常接触型体温計を使用してください。）	
		咳、呼吸困難、全身倦怠感、咽頭痛、味覚・聴覚障害、目の痛みや充血、頭痛、関節痛、下痢、吐き気、嘔吐の症状の有無について確認をし、症状がある方の参加を防止します。	
密閉空間を避けるための対応	1 時間に 1 回の休憩を取り、出入口の扉や窓を開放して換気を行います。		
陽性者発生時の連絡	参加者に「陽性者」が出た場合、速やかに当協会までご連絡ください。TEL：048-833-2992		
講師側が行うこと	衛生対策	アドバイザー・講師は前日・当日の検温を実施し、37.5 度以上の場合は事業に参加しません。	✓
		アドバイザー・講師は常時マスクを着用し、率先した手洗いと手指消毒を徹底します。	✓
		事業実施日の 2 週間前から体調管理に注意して過ごします。	✓
		事業実施内容について、グループ活動や配布物の有無、参加者による物品の共有などがある場合は事前の相談を徹底します。	✓
		アドバイザー・講師から「陽性者」が出た場合、速やかに連絡をいたします。	✓

確認日：令和 年 月 日（ ）

事業実施日：令和 年 月 日（ ）

団体名： _____

講師登録状況と国別派遣実績



現在の講師登録者状況は、外国人講師 104 名、日本人講師・アドバイザー63 名。今年はコロナ禍ではあったが、20の国と地域の外国人講師に協力いただいた。

コロナ禍での実施についての情報共有

【授業方法について】

◆クイズ形式の文化紹介(アルゼンチン講師)



写真はじゃんけんのジェスチャーでクイズの回答体験をしているところ。

「朝食に何を食べたか？」グーはごはん、チョキはパン、パーはそれ以外で全員が回答。このようなクイズの後に、アルゼンチンの朝食文化の話をするなど文化紹介の方法を工夫。

答え方はグーチョキパーだけでなく、ABC、各言語の数字の読み方にしてもいい。コロナの為だけではなく、おとなしい子供たちも含めて全員が参加できるような授業展開になった。

◆リズム手遊び(ロシア講師)



写真は音楽の中に登場する動物(牛や犬や猫など)を音に合わせて表現するロシアの手遊びを体験中。座ったままでできるアイスブレイクを入れる事で、話を聞くだけでは退屈してしまう授業も楽しく記憶に残るようにした。文化紹介では、声を出さなくても答えられるようにロシアの国旗の赤と青の色紙を準備して質問に答えてもらうように工夫。体験活動では、今年初めてロシア語で自分の名前を書く体験を取り入れて実践。

【意見交換】

- ・協会としてコロナに対してのガイドラインがあるなら教えてほしい
- ・マスクが苦しく、声が届かないこともあるのでマイクの準備が必要だと思う
- ・パネルシートを用意したらどうか
- ・依頼を受けた時点で、協会から学校へマスクの利用などで発生するリスクなどは伝えてほしい

→本年度に限ったことではなく、コロナ禍での授業は来年度も続くと思われる。その中でも学校からの依頼があれば事業は実施する。協会としての感染防止対策はチェックシートを作って皆さんと学校とも共有をしている。基本的には学校の対策に従って授業をしてもらうことになる。ただし、フェイスシールド・パネル・マイクなどについては、今後は必要に応じて学校へ準備のお願いをするようにしたい。オンラインでもできることがあると実感した1年でもあった。今後皆さんと相談した上でオンラインの授業も選択肢の一つとして導入することも検討していきたい。

SDG s 勉強会

なぜ研修会のテーマとしてSDG sを取り上げる必要があるのか。

「持続可能な開発目標」=「Sustainable Development Goals」は2015年に国連で採択されてから、より多くの国を巻き込んで世界的に取り組むようすすめられてきた。その中で日本も2030年の目標達成に向けて、今まで以上にSDG sに目を向けようと様々な場所で様々な活動が活発化しているという背景がある。学校でも先生が授業に取り入れることでSDG sの考え方を学ぶ子供たちは増えている。

「誰一人取り残さない」というSDG sのキーワードのもと、自分には何ができるのか、自ら考えて動けるようになろうという視点を盛り込んだ授業を学校の中だけでなく、外部の講師からもわかりやすく学びたいという要望も増えてきているので、今回研修のテーマとして取り上げた。

グループワーク発表

普段話している自分の授業でSDGsと関連している部分を考えて意見交換してもらう。また、どのように授業の中に取り入れていったらいいかを各グループで考えみんなで共有。

1 グループ (日本人講師)

日頃、話をしている内容の中でSDGsとリンクすることをそれぞれ意見として出し合った。その中で気づいたこととして、遠い外国の問題だけがSDGsの考え方だけではなく、普段の生活の中にこそ課題はあることに気づいた。そのため視点を遠くにしたり近くにしたりしながら話をすることも大切だと感じた。



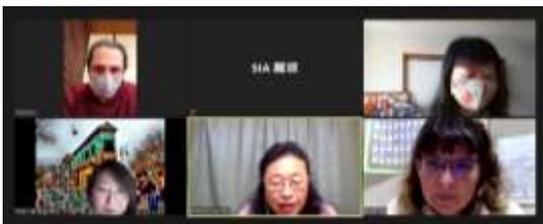
2 グループ(外国人講師+アドバイザー)

公共交通機関の優先席、絶滅危惧種などの環境問題、食文化など日本と母国での生活文化の比較から意見を出し合った。普段話をしている内容の中に、実は17の目標がすでに入っていたということに気が付いた。17の目標は1つ1つバラバラではなくてみんなつながっていると感じた。



3 グループ (外国人講師+アドバイザー)

日本での外国人採用問題、食品ロス、日本のレディーステイ、家の中や職場での男女の立場、環境問題についてなど、様々なSDGsとの関わりについて日本で生きる外国人として日本と母国の両方の視点から話合った。男女も外国人も弱い立場の人も、誰一人取り残される人がいないようにしなければいけないと感じた。



4 グループ(外国人講師+アドバイザー)

学校で普段話している1つのテーマが17の目標の3つ4つに関わっていたことが分かった。SDGsをきちんと理解して話をするのが何より大切だと感じた。例えば貧困や飢餓についてはステレオタイプの偏見を作るということになりかねない。また、ジェンダー問題は宗教に関わってくることもあるので価値観の押し付けになりかねない。日本で生活している身近な外国人講師からの話なので、温暖化や環境問題の壮大すぎるテーマよりは身近な話と関連付けて話をする必要があると思う。



まとめ

- ◆ごみ問題にしても温暖化にしても昔は一部の地域だけの問題だったが、今では世界の問題として考えなくてはいけなくなっている。SDGsという言葉がなくても、今私たち全員が地球の仲間として一緒に抱えている地球上の課題、それこそがSDGs。誰一人取り残さないという一人一人を大切にリスペクトすることこそが大前提のキーワードなのでそれを忘れないで授業に取り入れることが必要。
- ◆今後も学校からの依頼内容に合わせて授業をしてもらうのは変わらない。研修をしたからといって全部の学校でSDGsの話をしてくださいということではない。ただ、今までもSDGsという言葉を使っていなかっただけで、キーワードをもとに17の目標にリンクする話をしていたことが今日の研修を通して分かった。外国人講師は今後も話の内容を変更する必要はないが、アドバイザーは講師の話とSDGsのリンク付けをフォローしていくことはできる。事前打ち合わせの中で学校に講師のフォローを頼んでおくことは可能。アドバイザー自身も授業の中でサポートするという手法はとれるのではないかな。
- ◆今までのように、日本と母国、日本と海外の活動国の違いを伝えることで問題提起することは、学習者にとってその後の事後学習や他の教科への学びにつながり、日々の生活の変化へもつながっていくことになる。それがトビラ事業を実施してもらい意味にもつながっていくと思う。